

## 時間と復讐：『マクベス』の構造

著者名(日)	田口 孝夫
雑誌名	Otsuma review
巻	19
ページ	39-48
発行年	1986-06
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00004488/">http://id.nii.ac.jp/1114/00004488/</a>



## 時間と復讐—『マクベス』の構造

田 口 孝 夫

### — 1 —

シェイクスピアの『マクベス』は復讐悲劇ではない。クローディアス同様、マクベスは国王弑逆という卑劣な手段によってみずから王座にのぼるが、ここには宮廷にあって復讐の機を窺う王子の姿はない。また、ハムレットに復讐せよと迫った亡霊は、今度は宴の席に現われ暗殺者を見つめるばかりで何も語らず、また、ハムレットに復讐の遅延をもたらした遅疑逡巡や狂気は、逆に王位篡奪者の中に巣くって彼の心をむしばむ。トマス・キッド (Thomas Kyd, 1558-1594) によって開拓されたとされる復讐悲劇の道具立ては一応揃っているようでありながら、その実、この作品はその常套的な枠組みから大きく逸脱しているのである。

それでも、もし、後にマクベス征討の軍を起こす王子マルコムが私怨によってみずからマクベスに復讐の刃を奮うことになっていれば、『マクベス』は『ハムレット』同様、エリザベス朝復讐悲劇の系譜に連なる作品になっていたにちがいない。マクベスは血の海を渡るかのようにつぎつぎに殺戮を重ねるが、これすべて、初めのダンカン王暗殺に端を発しており、他の殺戮はいわば付随的なものにすぎない。復讐劇の論理によって帳尻を合わせるとすれば、マクベスはまず何よりもこの国王弑逆という罪ゆえに裁かれる運命にある。マクベスの首級をあげる役割は王子マルコムにこそふさわしいのである。

しかし、じっさいにマクベスを手にかけるのはマクダフである。マクダフは母国を暴君の圧政より解放するという公的正義に支えられて愛する妻子の仇討

ちを果たす<sup>2)</sup>。マクダフに私的な復讐の念があったことは戦場でマクベスにまみえたいと願う彼のセリフに明らかである。

おまえが死んで一太刀もあびせることができなかったとすれば  
俺はずっと妻と子供の亡霊につきまとわれよう。(V.vii. 15-16)<sup>3)</sup>

それではマクベスはマクダフの復讐の刃の前に倒れるのかといえばそうではない。マクベスの野心の軌跡を辿ってきた観客にとっては、彼の死は他ならぬ大逆の罪に対する当然の報いとして意識されるはずである。マクベスはマクダフの妻子惨殺のゆえにではなくダンカン王殺害の罪ゆえにマクダフに倒される。つまり、マクベスの悲劇の発端と結末は復讐の論理による因果関係をなしていないのである。では、国王を殺したマクベスはなぜマクダフに殺されなければならなかったのか。本稿は、マクベスの行為の意味を探ることによってこの問いにひとつの解答を与えようとするものである。それは同時に有機的統一体としてのこの作品の構造を明らかにすることにもなるはずである。

## — 2 —

『マクベス』という作品には時間の意識が顕著である。マクベスの王冠への野望に火をつけたものは魔女の予言であり、予言とはそもそも「未来に起こることを語ること」である。ヒースの荒野でマクベスを迎えた3人の魔女は過去から未来に流れる時間をすべて視野に収めているかのように語り出す。

魔女 1 ようこそ、マクベス！ ばんざい、グラミスの領主！

魔女 2 ようこそ、マクベス！ ばんざい、コーダーの領主！

魔女 3 ようこそ、マクベス！ やがては国王になるはず。(I.iii. 48-50)

「不忠この上ない裏切り者」のコーダーの領主はグラミスの領主マクベスに破れ今は処刑を待つ身であり、「彼の失った地位」(‘his former title’) はダン

カン王によってすでにマクベスに与えられている (I.ii)。本人は知らないがマクベスは現在コーダー領主なのである。シェイクスピアが材源として利用したと思われるホリンシェッド (Holinshed) の『年代記』 (*Chronicles*, 1577) によれば、コーダーの謀叛はマクベスが魔女と出会った「直後に」 ('shortlie after') 起こる<sup>4)</sup>。シェイクスピアは第2の魔女の「コーダーの領主」という呼び掛けを、未来の先どりではなくマクベスの新たな現在の称号に変えることによって、魔女の予言に過去・現在・未来という時間の3つの相を導入したことになる。

ところで、この魔女たち (Witches) は自分たちのことを「運命の3姉妹」 ('Weird Sisters', I.iii. 32) と呼ぶ<sup>5)</sup>。またバンクウォーも同様の呼び方をする (II.i. 20 etc.)。もし、この3人が魔女ではなく、人間の誕生と生と死とを司どる運命の女神であるとすれば、彼女たちは生命の糸によって人間の一生の時間を左右できることになる。ホリンシェッドの年代記には、マクベスたちを迎える3人の魔女を描いた木版画がそえられているが、彼女たちのまとっている立派な衣装は「奇妙な粗雑な衣装」 ('strange and wild apparell') というテキストの記述と合わない。この木版画に関する限り彼女たちは魔女というよりは運命の3女神を連想させる。ドゥーブラー (John Doeblér) はここに描かれた3人の女性は老年・中年・若年という3段階に描き分けられているという<sup>6)</sup>。シェイクスピアの魔女は運命の女神であるのかどうかという議論はさておくとして、彼女たちも時間の3つの相を表わすべく3段階の年齢差が想定されていたと考えるべきである。

— 3 —

人生の秋を悟った虚無的なマクベスは「明日また明日また明日、記録された時間の最後の最後に至るまで、一日一日と、このちっぽけな足どりでいつの間にか過ぎ去っていく」 (V.v.19-21) とひとりごちる。これはいかにも終焉を間近に控えたマクベスにふさわしいセリフである。彼は過去から未来に向かって非可逆的に進行する不断の時の歩みに対して2つの暴挙を企てた<sup>7)</sup>。その暴挙の果てにたどり着いた結論がこの独白となっているのである。

マクベスは予言で示された未来の虚像に幻惑されて国王弑逆という恐るべき罪を犯す。その行為はマクベスにとっては時間をジャンプすることに他ならない。みずから傍白で語っているように、「偶然によって王になれるというのなら、そう、それなら自分で動かなくても偶然が王冠を与えてくれるはず」(I.iii. 144-45)であった。彼は自然な時の流れにまかせて機熟するのを待てばよかった。しかしダンカンが長男マルコムを世継ぎと定めたことを知って、彼はけっきょく時間をジャンプして予言で約束された未来に飛びつく。あるいは逆の表現を使えば、暴力的に未来を現在に引き寄せる。のちに時の到来を待ってマクベス征討の軍を起こすマルコムは「マクベスは熟した果実、ゆすれば落ちる」(‘Macbeth is ripe for shaking’, IV.iii.237-8)という。時間をめぐる両者の対立は明らかである。

弑逆決行という時間を跳びこえる行為にマクベスを駆りたてた原因の一つは彼の豊かな想像力である。ダンカン殺害は固定観念となって彼の心を捉えて離さない。彼は「恐怖を目の当たりにするよりも想像していた方が恐ろしい」(I.iii. 137-8)といい、さらに「今、存在しないものしか存在しない」(‘nothing is, but what is not’, I.iii. 142)という。「今、存在しないもの」とは、未来の王冠、あるいはそれを我がものとするための暗殺行為のことをさしている。いずれにしてもこれは彼の現在が未来によって侵食されていることを示している。

また手紙によってことの次第を知らされたマクベス夫人も魔女と同じ言葉でマクベスを迎え、やはり、現在という時間を跳びこえてしまったと語る。

偉大なグラミス！ ご立派なコーダー！

未来の祝福 (the all-hail hereafter) によればそれ以上に偉大なお方！

あなたのお手紙を読み、私は

この何も知らぬ現在 (This ignorant present) を跳びこえて

今のこの時に (in the instant) 未来 (The future) にいる思いがしています。  
(I.v. 54-58)

マクベスも夫人もすでに現在という時間の中で未来を体験している。あとは想像の世界において経験したこの時間の跳躍を現実の世界に移すだけのことにすぎない。

しかし、決行に及ぶ前にもう一つ彼の心を捉えていた問題がある。「片手落ちのない公平な正義」(‘even-handed justice’, I.vii. 10) という問題である。犯罪を犯せば当然、罰が下る。今、ダンカンを城に迎えて生殺与奪の権をにぎっていないながら彼が迷う理由はそこにある。

ことを行なってそれで終わりというのなら、  
それなら、すぐにもやった方がいい。暗殺することで  
その結果を絡め取り (trammel up the consequence)  
彼の死によってめでたく収まるものならば、  
この一撃だけですべてが終わりというのなら、  
時の大海のこちら側、この世だけでけっこうだ、  
あの世の命は賭けてもいい。だが、こんな時、  
えてして裁きはこの世で受けることになる。(I.vii. 1-8)

マクベスはダンカンを殺害したのち、因果関係の鎖を絶ち切って、それを過去の中に封じ込めなければならない。つまり、わが身の安泰のためには過去の悪業が未来に暗い影を投じることのないように時間の流れを切断しなければならないのである。前述の「時間に対するふたつの暴挙」のうち、残る一つはこの時間の切断のことである。首尾よく王座についたマクベスが次々に殺戮を繰り返すのは、過去の行為の結果を絡め取ろうとする空しいあがきに他ならない。

— 4 —

マクベスは暗殺を決行した直後に、「この1時間前に死んでいたら、俺は祝福された生涯 (a blessed time) であったのに」(II.iii. 91-2) とつぶやく。しかし、マクベス夫人のいうとおり「済んでしまったことは仕方がない」(‘what’s

done is done', III.ii. 11-12)。時間を逆行することは不可能である。今の彼に残された道は、過去を過去として葬り去ること、すなわち、未来の不安の芽を摘み取ることより他にない。そしてここからマクベスの時間との勝負が始まる。

さあ、運命よ、試合場 (list) にやってこい。

とことん、俺と決闘だ。(III.i. 70-71)

マクベスと時間との対決はまずバンクウォー父子の暗殺をめぐって展開される。バンクウォーはマクベスを大逆の罪に走らせたその誘因を知る唯一の人物である。そのうえ、予言によれば、やがては彼の子孫が王冠を戴くことになるという。二重の意味でマクベスの未来をおびやかす人物である。バンクウォーがこの世にあるうちは、「ヘビは切ったがまだ殺していない」(III.ii. 13) といった状態に等しい。マクベスは刺客を放ってこの「恐るべき存在」(III.i. 54) を抹殺する。いま、刺客の報告を受けたマクベスは「親ヘビはもう死んでいる (lies)」(III.iv. 28) という。しかし、これはみごとに裏切られる。過去帳に入っている ('lies') はずのバンクウォーはよみがえって ('rise') 宴の席に姿を現わすのである。

ずっとこれまで (The time has been)

脳天を叩きつぶせば、人は死んで

それでおだぶつ。だが今ではまたよみがえる (rise)。(III.iv. 77-79)

ここで、髪を血に染めたバンクウォーの亡霊はマクベスの過去の犯罪そのものを表わしている。マクベスは最初の殺人を犯した直後、「自分のしたことを考えると恐ろしい。二度と見る気はしない」(II.ii. 50-51) といって、殺人の現場に行くことを拒んだことがあった。しかしこんどはそれは許されない。過去はマクベスの意表をついて現在に侵入して来る。過去が過去として葬られることを拒否しているのである。ホリンシェッドでは亡霊の出現という異常な事態は

起こらない。シェイクスピアにあっては時間がマクベスに反逆しているといつてよい。

過去ばかりではない。未来もそれを握りつぶそうとするマクベスの手を次々に滑りぬけていく。バンクウォーの息子フリーアンスが刺客の手を逃れて逃亡するのはそのよい例である。彼は「いずれ (in time) 毒を宿す体質をもっている子へび」(III.iv. 29)であり、また予言によって将来の王冠を約束された「バンクウォーの種」(‘the seed of Banquo’, III.i. 69)を後世に伝える存在でもある。いうまでもなく、ときの国王ジェイムズ I 世はマクベスの破壊の手を免れたこの種がみごとに開花・結実した姿であった。

さらにもうひとつ、再度、魔女と会って「マクダフに気をつけろ」(IV.i. 71)という警告を受けたその折しも折、彼のもとに当のマクダフがいちはやくイングランドに亡命したとの知らせが届く。時間がマクベスの先手を打ったのである。

時 (Time) よ、おまえは俺の恐るべき企みを出し抜いたな。(IV.i. 144)

マクベスはついに未来を刈り取ることができなかった。彼のもくろみは時間の反撃の前にことごとく潰え去っていくのである。

— 5 —

この作品には赤子殺しのイメージが頻出する。それは魔女がとなえる「生まれてすぐに縊り殺された赤ん坊の指」(IV.i. 30)のようにこの作品におどろおどろしい不気味な雰囲気を与えているばかりではない。マクベス夫人はこのイメージを用いて弱腰のマクベスを説得し大逆の罪へと踏み切らせる。

私には授乳の経験がありますから

乳を吸う赤ん坊がどれほど愛くるしいか、わかります。

それでもあなたがお誓いになったようにいったん誓いをたてたなら



その子が私の顔を見てにこにこ笑っているその時に  
 まだ齒のはえそろわない歯茎から私の乳首をひったくり  
 頭を叩きつぶして見せましょう。(I.vii. 54-9)

ここで夫人は後にマクダフの幼児を殺戮するマクベスと心理的に同じ罪を犯している。刺客に襲われたバンクウォーがただひたすら子供を逃そうとするのと対照的である。ブルックス (Cleanth Brooks) が指摘しているように<sup>8)</sup>、赤ん坊が未来を象徴しているとすれば、夫人は赤子殺しのイメージによって、皮肉にも自分たちの未来をみずからの手で葬る行為について語っていることになる。国王弑逆とはじっさいにそのような行為であったことはいうまでもない。

また、子供は魔女の洞窟のパジエントにも登場する。このうち3番目の幻影である「手に木の枝をもち王冠を戴いた子供」は、アーデン版の注釈にも見られるとおり、兵士たちに木の枝を切りそれを頭上にかざして進軍せよと命じる未来の国王マルコムを表わす。この子供も未来の象徴といえる。問題は2番目の「血まみれの子供」である。これは、マクベスの手の者に惨殺されるマクダフの子供の暗示ともとれるし、また、マクベスの「俺もこういうことについてはまだ青くさい (young)」(III.iv. 143) という言葉と思い合わせて、殺戮を重ねるマクベス自身ともとれよう。しかし、その幻影が語る「女から生まれたものは誰もマクベスに危害を加えることはできない」という予言は明らかに母親の腹を引き裂いて取り出されたマクダフという存在を背後に隠しもっている。「血まみれの赤ん坊」は何よりもまずこの帝王切開によるマクダフ誕生の姿と考えるべきであろう。ところでブルックスの議論を借用すれば<sup>9)</sup>、子供は未来のみならず「復讐の天使」をも象徴する。それはダンカン殺害を前に罪の報いを恐れて立ちすくむマクベスのセリフに明らかである。

風にまたがった生まれたばかりの裸の赤ん坊のように  
 また、目にもとまらぬ大気の早馬に乗った天使のように  
 哀れみ (Pity) がすべての人の目のなかに

この恐るべき振る舞いをホコリよろしく吹きつけて  
風もおさまるほどに涙の雨を降らせよう。(I.vii. 21-25)

第2の幻影「血まみれの赤ん坊」であるマクダフは、この名君ダンカンへの「哀れみ」を象徴する「生まれたばかりの裸の赤ん坊」と密接に繋がっており、やがて、ダンカンの恨みを晴らすべく再びマクベスの前に登場することになる。

— 6 —

繰り返していえば、マクベスはマクダフの妻子惨殺のゆえに倒れるのではない。この作品はマクダフの復讐物語ではない。マクダフの剣はマクベスが国王を殺した剣と切り結んでいる。国王暗殺とマクベスの死との因果関係を成立させているものは復讐劇の論理ではなく、一つには赤ん坊のイメージである。国王を殺したマクベスはなぜマクダフの手にかかって落命するのかという最初に掲げた問いに対して、一つ答えをあげるとすれば、マクダフはダンカン王の恨みを晴らすべく運命づけられた「裸の赤ん坊」だったからということになるだろう。赤ん坊と時間との関係についてはすでに述べたとおりであるが、この二つは次のマクダフの決定的なセリフにおいて融合し、マクベスに対して核反応にも似た大きな衝撃力を発揮する。

このマクダフは時を待たずに (Untimely) 母親の腹を切り裂き  
取り出されたのだ。(V.viii. 15-16)

衝撃力は「時を待たずに (Untimely)」というホリンシェッドには見られない一語に秘められている。マクベスはダンカン王暗殺によって時間をジャンプして予言の未来に飛びついた。彼は「時を待たずに」王座に就いたのである。その彼が「時を待たずに」この世に生を受けた男に倒されるのは「片手落ちのない公平な正義」の裁きといえるだろう。「目には目を」という復讐の論理は「時間」を復讐者とすることによって初めて成立する。マルコムに加わりバーナム

の森に進軍してきたスィワードは「時 (the time) が近づいている。やがて決着をつけてわれらが所有に帰すべきものと支払うものとを明らかにしてくれよう」(V.iv. 16-18) という。マクベスの首級をあげたマクダフが高らかに宣告する「時は自由だ」('the time is free', V.ix. 21) ということばはマクベスの敵の正体を明らかにすることばでもある。王冠を手にしたマクベスはバンクウォーを殺し過去を闇に葬ろうとしたばかりか、子供を殺し不安な未来を刈り取るうともした。マクベスは時間を意のままに操作しようとした罪のために時間に復讐されたのである。

—注—

- 1) Fredson Bowers はキッド流の復讐悲劇について次のように書いている。"The revenge must be the cause of the catastrophe, and its start must not be delayed beyond the crisis. 'Revenge tragedy' customarily (but by no means necessarily) portrays the ghosts of the murdered urging revenge, a hesitation on the part of the avenger, a delay in proceeding to his vengeance, and his feigned or actual madness." (*Elizabethan Revenge Tragedy*, Princeton; 1971, pp. 63-64.)
- 2) マクダフが公的正義に立脚していることに要注意。当時、私怨による復讐は「復讐するは我にあり」という神の掟に違背する行為であった (Bowers, *ibid.*, pp. 8-14)。復讐悲劇において復讐者が死ぬ運命にあるのはこのためである。
- 3) テキストはアーデン版を使用。訳は諸家の訳に必要なに応じて変更を加えたもの。
- 4) ホリンシェッドに対する言及はアーデン版の Appendix A にもとづく。
- 5) Folio 版では 'Weird' は 'wayward' となっている (Cf. Anthony Harris, *Night's Black Agents*, Manchester U.P.: 1980, pp. 33-34)。いずれにせよ、何度か繰り返される Fate (I.v.29, III.i.70, IV. i.84) に対する言及は彼女たちと運命の女神の連想を強める。
- 6) John Doeblér, *Shakespeare's Speaking Pictures* (University of New Mexico Press, 1974), p. 118.
- 7) Doeblér は、断片的にはあるが、"He (Macbeth) coerces time by hastening the death of Duncan and trying to prevent the succession of Banquo's issue" と指摘して、前者を "an accelerating of time's pace", 後者を "an attempt to stop time" と呼んでいる (*Ibid.*, p. 122.)。
- 8) Cleance Brooks, *The Well Wrought Urn* (Harvest Books, 1947), p. 46.
- 9) *Ibid.*, p. 49.

(付記) 本稿は昭和59年10月13日に催された大妻女子大学英文学会講演会において『マクベス』について」と題して語った内容をもとに、多少の修正を加えて新たにまとめたものである。